

The International Conference of Asia-Africa Entanglement in Past and Present : Bridging between History and Development Studies

申請区分

国際シンポジウム等助成費

実施期間

2015年7月31日 ～ 2015年8月1日

実施代表者

関西大学・経済学部・教授・北川 勝彦

実施分担者

関西大学・法学部・教授・山名 美加

関西大学・経済学部・教授・北波 道子

関西大学・経済学部・教授・後藤 健太

関西大学・経済学部・教授・新熊 隆嘉

同志社大学・グローバルスタディズ研究科・教授・峯 陽一


甲南大学・経済学部・教授・シュレスタ・マノージュ

Stellenbosch University・Professor・Cornelissen, Scarlett

成果の概要

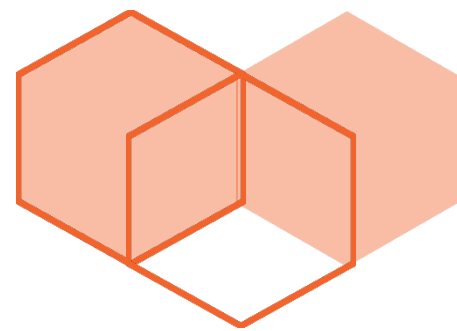
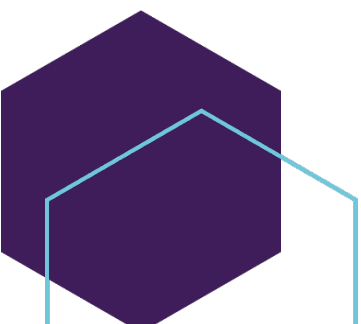
本国際シンポジウムは、関西大学が、創立130周年、経済学部創立110年、大学院研究科設置85周年を迎え、21世紀にふさわしい教育と研究に関する制度設計の新機軸と国際連携への展望を拓くために企画され、開催された。そのためには教育と研究に関する新たな国際的ネットワークの形成は急務であり、本シンポジウムにはアジア・アフリカ諸国において近年著しい成果をあげている高等教育機関で卓越した役割を演じている研究者を招いた。したがって、本シンポジウムの事業推進者には、関西大学に所属する研究者のみならず、他大学、とくにアジア・アフリカの研究者との連携に尽力されてきた3名の研究者を加えた。

本シンポジウムを通じて、アジアではインド、スリランカ（イギリス在住）、ネパール（日本在住）出身の研究者、アフリカではケニア、エチオピア、コンゴ民主共和国（アメリカ在住）、南アフリカ、ボツワナ、ジンバブウェ、ガーナ（イギリス在住）出身の研究者等が一堂に会し、近年、アジア・アフリカ研究において活発な研究活動が展開されている各テーマ（インド洋におけるアフリカ人の移動、労働史、工業化、開発と国家の役割、経済開発と環境、日本の対アフリカ政策）について議論を交える機会を提供できたことは、21世紀の関西大学が国際的に開かれた学術情報基盤の構築と国際的学術交流への展開という点で多大な貢献をなすことができた点で大きな意義があった。本国際シンポジウムに



提出された各論文は、組織者の下で編集され報告論文集 (proceeding: Katsuhiko Kitagawa ed., Africa and Asia Entanglements in Past and Present: Bridging History and Development Studies) として刊行される予定である。また、本シンポジウムに提出された論文の中でとくに日本語で成果を出版することが学術的な貢献となると判断されるものについては、別途、組織者の手で編集し、出版する予定である。

21世紀に入って、新興発展途上国としてのインド、南アフリカ、中国をはじめとしてアジア・アフリカ諸は、著しい経済成長を示し、国際的な政治経済関係に大きな変動をもたらしている。学術面では、アフリカ諸国間でアジア研究組織 (Association for Asian Studies in Africa, A-ASIA) が設立され、アジア諸国でもアフリカ研究ネットワークが形成され始めた。本シンポジウム終了後、組織者と事業推進者の数名は、2015年9月24~26日にガーナのアクラ (ガーナ大学) で行われた A-ASIA の第1回会議 (New Axis of Knowledge) においてセッションを組織し、さらに、2015年10月9~10日にインドのデリー (ジャワハルラー・ネルー大学) で行われた国際会議でも関連セッションに参加した。両国際会議には、関西大学で開催された国際シンポジウムに出席した研究者の参加があり、関西大学とアジア・アフリカ諸国の高等教育機関との学術交流をすすめるうえで必要なネットワークを強固なものにすることができた。こうした人的ネットワークの形成は、グローバル化構想のいっそうの展開と深化をめざす関西大学がインド洋西海域およびアフリカ大陸インド洋岸を含めた「広域アジア」という教育と研究の「交流圏」に位置する高等教育機関との学術交流を進展させていくうえでも重要な役割を演じるであろう。



平成 24 年度文部科学省大学間連携共同教育推進事業

「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援」

申請区分

教育改革プログラム等支援経費

実施期間

2015 年 4 月 1 日 ～ 2016 年 3 月 31 日

実施代表者

関西大学・文学部・教授・中澤 務

実施分担者

関西大学・文学部・教授・本村 康哲

関西大学・経済学部・教授・林 宏昭

関西大学・教育推進部・特別任命助教・小林 至道

関西大学・教育推進部・特別任命助教・西浦 真喜子

関西大学・教育推進部・特別任命助教・毛利 美穂

成果の概要

1 eポートフォリオの開発に係る取組

基本機能であるライティングセンターの予約管理システムの本格的な活用を図り、活用実績を上げるとともに、eポートフォリオ機能についても運用を開始し、適宜検証を実施して、改善を図った。これによって、ライティングラボおよび授業でのライティング支援をより効果的に実施し、学生の〈考え、表現し、発信する力〉の向上を促すことがいっそう容易となった。

(1)今年度の実施計画

eポートフォリオのポートフォリオ機能を実際に運用し、基本機能であるライティングラボの予約や指導記録を活用して、その検証と改善を実施する。これらにより教育環境の充実と利用者の増加を図る。

(2)今年度の実績

ア 4月よりライティングラボの予約および指導記録機能である TEC-book の活用を本格的に開始し、ライティングラボでの個別指導を実施した。これによって、ライティングラボの利用がしやすくなり、ライティングラボ利用者数の大幅な増大につながった。

イ eポートフォリオ機能である TEC-folio の試験的運用と、改善を実施した。現在、試験運用中であり、一部の授業における試行的利用をおこなっている。開発は完了し、2016 年度春からの本格的運用に向けて、学内での広報などの準備をおこなっている。なお、これに並行して、本取組の成果を波及させるべく TEC-book と TEC-folio の他大学での活用に向けたオープンソース化の準備をおこなっている。

(3)今年度の成果

ア ライティングラボの予約・指導記録管理をめぐる総合的なシステムが本格始動することにより、ライティングラボの利便性を向上させることができた。これによって、ライティングラボの利用者が飛躍的に向上し、より多くの学生がライティング指導を受けることが可能になった。また、指導記録の活用が、従来よりも効果的に行えるようになったため、指導の情報の共有や効果的な活用が可能となり、ライティング支援の質をさらに高めることができた。

イ TEC-folio の機能は、本取組の理念である〈考え、表現、発信する力〉を育成し、学生ライティング支援の接点となるだけでなく、社会に向けて発進していくための基盤ともなるものであり、時間をかけて慎重に開発と改善を進めた結果、当初の目的を実現しうる有効なシステムを開発することができたその効果は、現在のところ一部の実験クラスに限られているが、授業やライティングセンターでの支援等に効果が高いことが確かめられている。次年度に本格的な活用がおこなわれることで、ライティング支援の質がさらに向上すると予想される。

2 ガイドブック・リーフレット作成に係る取組

(1)今年度の実施計画

各種ガイドブックを作成し、ライティング指導で活用する。

(2)今年度の実績

『ライティングラボ利用案内』、『レポートの書き方ガイド（発展篇）』を作成し、教員・学生に配付し、自学自習の場での利用を促したり、ライティングの個別指導での活用をおこなった。

(3)今年度の成果

ライティング力を向上させるガイドブック・リーフレットを作成し、支援に活用することによって、ライティング指導の効率化が促進され、学生のライティング力が向上した。また、ガイドブックの作成が授業の中で活用されることによって、ライティングセンターと授業カリキュラムのより密接な連携体制が構築された。

3 成果報告書作成に係る取組

(1)今年度の実施計画

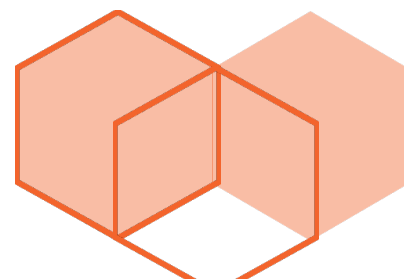
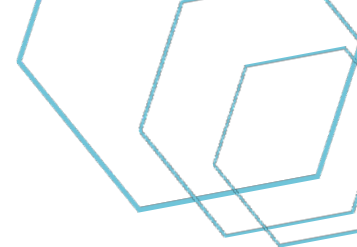
今年度の取組の報告書を作成する。

(2)今年度の実績

3月に本取組の報告書を作成し、全国の主要大学および学外関係者へ送付した。

(3)今年度の成果

詳細な報告書が作成されることによって、ライティング／キャリア支援体制の点検・評価・改善が促進され、学生に対する支援をいままで以上に充実させることができた。また、報告書を全国の主要大学に送付することによって、本取組の情報を全国に広く知らせることができた。これによって、学生の〈考え、表現し、発信する力〉を向上させていくための環境をさらに広げることができた。



実施成果

〔雑誌論文〕 計（ 0 ）件 うち査読付論文 計（ 0 ）件
（著者名、論文標題、雑誌名、巻、発行年、最初と最後のページ、査読の有無）

〔学会発表〕 計（ 7 ）件 うち招待講演 計（ 0 ）件
（発表者名、発表標題、学会等名、発表年月日、発表場所）

- 1 小林至道、ルーブリックの組織的導入と活用～関西大学の事例紹介～、大学教育学会第37回全国大会、2015年6月8日、長崎大学
- 2 西浦真喜子、小林至道、毛利美穂、ライティングセンターを核とした学習成果の可視化、SPODフォーラム2015、2015年8月26日、愛媛大学
- 3 小林至道、毛利美穂、本村康哲、ユーザ行動に基づいた学習ポートフォリオシステムの設計、教育システム情報学会40回全国大会、2015年9月1日、徳島大学
- 4 本村康哲、毛利美穂、小林至道、西浦真喜子、ライティングセンター運営支援システムの設計と運用、教育工学会第31回全国大会、2015年9月21日、電気通信大学
- 5 毛利美穂、小林至道、西浦真喜子、関西大学 GP におけるライティングルーブリックの開発と評価課題、第14回関西大学 FD フォーラム・大学教育学会課題研究「学士課程教育における共通教育の質保証」合同企画イベント、2015年9月30日、関西大学
- 6 小林至道、毛利美穂、西浦真喜子、ライティングセンターによるライティング支援のためのルーブリックの開発、第22回大学教育研究フォーラム、2016年3月17日、京都大学
- 7 西浦真喜子、小林至道、毛利美穂、ライティングセンターの利用のきっかけと継続的な利用についての量的分析、第22回大学教育研究フォーラム、2016年3月17日、京都大学

〔図 書〕 計（ 1 ）件
（著者名、書名、出版社、発行年、総ページ数）

- 1 西浦真喜子、小林至道、毛利美穂、株式会社 NPC コーポレーション、レポートの書き方ガイド（発展篇）、2015、34

〔出 願〕 計（ 0 ）件
（発明者、権利者、産業財産権の名称、産業財産権の種類、番号、出願年月日、国内・外国の別）

〔取 得〕 計（ 0 ）件
（発明者、権利者、産業財産権の名称、産業財産権の種類、番号、出願年月日、国内・外国の別）

「イスラムと国際社会」

申請区分

国際シンポジウム等助成金

実施期間

2015年9月14日 ～ 2015年9月16日

実施代表者

関西大学・法学部・教授・佐藤 やよひ

実施分担者

関西大学・法学部・教授・市原 靖久

関西大学・法学部・教授・葛原 力三

関西大学・法学部・教授・高作 正博

関西大学・法学部・教授・竹下 賢

関西大学・法学部・教授・角田 猛之

関西大学・法学部・教授・中野 徹也

関西大学・法学部・教授・西 平等

関西大学・文学部・教授・小田 淑子

関西大学・文学部・教授・吹田 浩

関西大学・文学部・教授・藤田 高夫

関西大学・文学部・准教授・澤井 一彰

関西大学・政策創造学部・教授・岡本 哲和

関西大学・法科大学院・教授・早川 徹

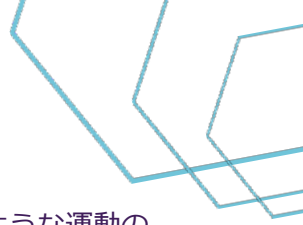
関西大学・法科大学院・教授・村上 幸隆

成果の概要

平成27年9月14日から16日の3日間、「イスラムと国際社会」という統一テーマの下に3日間それぞれ個別テーマをもうけ、別個の観点から現在、イスラムおよびイスラム教徒の間で、そして国際社会との関係でどのような問題が生じているかにつき、UAE およびエジプトからの研究者と日本人研究者との間で、極めて興味深い意見交換をすることができた。個別報告は以下の通りである。

9月14日は「イスラム戦争法及び国際法から見たIslamic State」という個別テーマの下に、ISの目指すカリフ制国家の建設、およびその手段としてのテロがコーランおよび伝統的イスラム法の観点からどのように捉えられるか、そしてそれが我が国を含めた欧米先進国が歴史的に形成してきた国際法の観点から如何に捉えられ、どのような点が問題になるかが議論された。

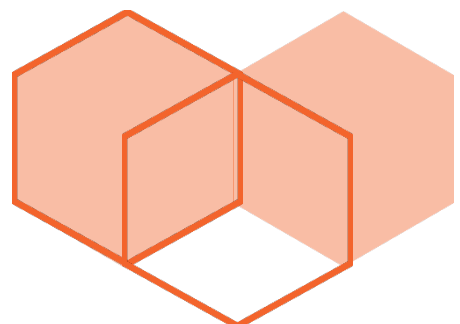
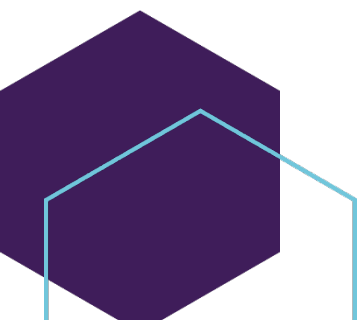
9月15日は「アラブの春は何をもたらしたか---とりわけ女性の地位に現れた変化」という個別テーマの下に、最初にアラブの国でジャスミン革命が起きたチュニジアが元々、アラブの国の中では極めて



民主化と女性の平等化が進んだ国であったのが、民主化運動の後、チュニジア初め、そのような運動のあった国では反動が生じていること、それに対しそのような民主化運動が抑えられたサウジアラビアのような国では、かえって女性の社会進出を認めようとする動きが強まっていることの報告があった。それぞれ各国の事情が異なり、複雑な要因がからんでいるので、なぜこのような反動あるいは促進がなされているのか、一言では説明はできないが、ジェンダー論の立場からするとアラブ各国の動きは眼を離せないものであることが明確になった。

9月16日は「世界遺産及び文化遺産の保護」という個別テーマの下に、エジプトおよびアフガニスタンでの遺跡発掘・調査の専門家から保護のために何が問題となるかが明確になった。

特にバーミヤンでのタリバンに依る巨大石仏破壊の後、その修復にたずさわった前田耕作和光大学名誉教授の話から、ISによる遺跡破壊の後、我が国の今後の協力の在り方が具体的になった。また、京都大学名誉教授香西茂先生が文化財保護条約についてご自身の経験を踏まえてお話をされた。報告者・コメンテーターいずれのお話もめったに聞くことのできないもので、大変興味深いものであったため、座長が制限時間オーバーを制止せず、予定を大幅に超えるものとなった。





文化資本コンテンツの構築と地域振興に向けた情報発信

申請区分

研究促進費（共同）

実施期間

2015年7月1日 ～ 2016年2月29日

実施代表者

関西大学・総合情報学部・教授・林 武文

実施分担者

関西大学・総合情報学部・教授・堀 雅洋

関西大学・総合情報学部・准教授・井浦 崇

成果の概要

本研究プロジェクトは、地域の歴史、自然、街並、風習などの地域社会に根ざした文化資産を対象とし、情報技術を活用して効果的な情報発信を行うことにより、新たな価値創出と地域の活性化に貢献することを目的としている。当該研究期間には、小型無人航空機(UAV) と 360度全周囲ムービーカメラにより地域の自然とイベントを撮影し、新たに開発した球体ディスプレイシステムを用いたメディアアートコンテンツを開発した。このコンテンツを国内外の様々な場所で公開し有効性を検証した。得られた結果を以下に記す。

(1) 内部投影型球体ディスプレイの開発

市販のプロジェクタ、魚眼レンズ、半透明の球体スクリーンを組み合わせた内部投影型の球体ディスプレイを開発した。本ディスプレイは、低コストでの制作と運用が可能であり、展示場所や用途に応じて球体の大きさや材質の変更も容易である。

(2) 地域の魅力を伝える映像の蓄積

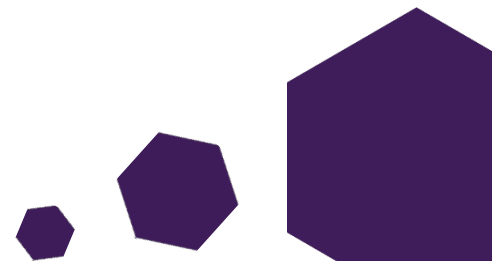
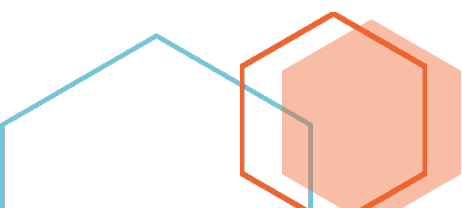
キャンパスの所在地である高槻市の自然とイベントを、小型無人航空機(UAV) と全周囲パノラマムービーカメラ(RICOH THETA) を用いて撮影し、360° 動画像として蓄積した。

(3) 球体ディスプレイを用いたメディアアートコンテンツの開発

インタラクティブ 3DCG 技術を用い、球面オブジェクトにマッピングした 360° 動画像を、センサ入力によって操作するメディアアートコンテンツを開発した。

(4) コンテンツの公開と評価

Ars Electronica Festival2015 (2015. 9. 1-7, Linz, Austria)、SIGGRAPH ASIA 2015 (2015. 11. 3-5, 神戸国際会議場)での発表に加え、高槻市内のイベント（高槻アート博、オープンキャンパス）やグランフロント大阪・ナレッジキャピタル The Lab.での展示を行った。それぞれの展示会場で参加者より高い評価を受け、コンテンツの有効性を確認した。



実施成果

〔雑誌論文〕 計（ 1 ）件 うち査読付論文 計（ 1 ）件
（著者名、論文標題、雑誌名、巻、発行年、最初と最後のページ、査読の有無）

- 1 平尾修吾・井浦崇・堀雅洋・林武文、全天球映像を用いた球面リアプロジェクションシステムの開発と評価、芸術科学会 Nicograph2016 論文集、2016、pp.1-4、有

〔学会発表〕 計（ 2 ）件 うち招待講演 計（ 1 ）件
（発表者名、発表標題、学会等名、発表年月日、発表場所）

- 1 T.Hayashi, M.Hori, T.lura et al. 、 Folklore Sphere ・ Seeking to Discover and Impart Regional Values ・ 、 Art Electronica Festival 2015 （招待講演）、2015.9.3-7、Linz, Austria
- 2 T.Hayashi, M.Hori, TJura et al.、 Folklore Sphere (Media Art Work)-、 SIGGRAPH ASIA 2015 Exhibition 、 2015.11.3-5、神戸国際展示場

〔図書〕 計（ 0 ）件
（著者名、書名、出版社、発行年、総ページ数）

〔出願〕 計（ 0 ）件
（発明者、権利者、産業財産権の名称、産業財産権の種類、番号、出願年月日、国内・外国の別）

〔取得〕 計（ 0 ）件
（発明者、権利者、産業財産権の名称、産業財産権の種類、番号、出願年月日、国内・外国の別）

バチカン図書館所蔵アジア関係文献資料整理とデジタル化

申請区分

研究促進費（共同）

実施期間

2015年9月1日 ～ 2016年3月31日

実施代表者

関西大学・外国語学部・教授・内田 慶市

実施分担者

関西大学・外国語学部・教授・沈 国威

関西大学・外国語学部・教授・奥村 佳代子

成果の概要

今回の研究の特色は、カトリック本山のバチカン図書館におけるアジア関係文献資料の調査、整理、デジタル化という、これまで世界に例を見ないものである。

これまでに日本関係と中国関係の文献については北京外国語大学と日本のNITデータによって整理、デジタル化がほぼ完了しているが、モンゴル、朝鮮、チベット、ベトナム、カンボジア、インド、フィリピンといった日中以外のアジア諸国のバチカン所蔵文献については手つかずの状態であり、これらの整理、デジタル化は、基督教史、東西言語文化接触史研究等に大きく寄与するものと考えている。今回の研究によって、バチカン所蔵のアジア関係文献資料の網羅的なデジタル化、アーカイブ化が実現し、まさに世界的な事業としてその貢献は高く評価されるはずであり、学内外、国内外に与えるインパクトは極めて大きいものであると考えている。また、バチカン図書館との連携は、本学が推し進めようとする国際化の流れにも符合するに余りあるものである。

具体的な研究概要について述べると、まず2015年9月に研究代表者と共同研究者の沈国威が他の研究費によるローマ大学での学会出張の際にバチカン図書館を訪れ、東洋部主任の余東氏と今後の調査の進め方についての打ち合わせを行い、2016年2月に研究代表者と共同研究者の奥村佳代子、アシスタントの院生3名、さらに、沈国威に代わってアジア文化研究センターのPDの氷野善寛の6名で本格的な調査を行った。その結果、ベトナム文献が34種、満文文献が4種、朝鮮文献が6種、モンゴル文献が1種、チベット文献が3種が確認され、それらの基本的な書誌を記録することができた。今後は、これらをデジタル化し、解題を付して公開する作業が残されているが、これについては平成28年度中に完成させる予定である。なお、本プロジェクトはバチカン図書館と、関西大学、北京外国語大学、ローマ大学の4組織の共同プロジェクトとして位置づけられている。

実施成果

〔雑誌論文〕 計（ 5 ）件　うち査読付論文 計（ 2 ）件

（著者名、論文標題、雑誌名、巻、発行年、最初と最後のページ、査読の有無）

- 1 内田慶市、カ薩納特圖書館藏雍正朝教案檔案、東西学術研究所紀要、第 49 号、2016、7-20、有
- 2 内田慶市、漢譯聖經研究的新的局面－以『古新聖經』為主－、關西大學中國文學會紀要、第 37 号、2016、1-13、有
- 3 沈国威、嚴復的“格致”：從培根到斯賓塞——以『天演論』前後為中心、『亞洲概念史研究』、第 3 号、2015、15-36、無
- 4 沈国威、嚴復科学思想的淵源：從培根到穆勒、『思想與方法』（単行本）、2015、245-290、無
- 5 内田慶市編、バチカン図書館アジア関係文献—影印と解題(仮題)、東西学術研究所紀要、2017、投稿予定、無

〔学会発表〕 計（ 1 ）件　うち招待講演 計（ 0 ）件

（発表者名、発表標題、学会等名、発表年月日、発表場所）

- 1 内田慶市、東亞文獻資料的電子化的現状和未來、Digital Humanities and East Asia Literature Research、2015.12.12、台湾大学

〔図書〕 計（ 1 ）件

（著者名、書名、出版社、発行年、総ページ数）

- 1 内田慶市・沈国威、関西大学出版部、東アジア言語接触の研究、2016、440

〔出願〕 計（ 0 ）件

（発明者、権利者、産業財産権の名称、産業財産権の種類、番号、出願年月日、国内・外国の別）

〔取得〕 計（ 0 ）件

（発明者、権利者、産業財産権の名称、産業財産権の種類、番号、出願年月日、国内・外国の別）



世界工学会議 2015 での研究交流と世界に向けての研究成果の発信 ～環境、化学・エネルギー、社会安全、情報技術など先端科学技術が もたらす、豊かで安全安心な暮らしをめざして～

申請区分

研究促進費（共同）

実施期間

2015年11月1日 ～ 2015年12月31日

実施代表者

関西大学・環境都市工学部・教授・河井 康人

実施分担者

関西大学・社会学部・教授・林 直保子

関西大学・社会安全学部・教授・高橋 智幸

関西大学・社会安全学部・准教授・小山 倫史

関西大学・システム理工学部・教授・青柳 誠司

関西大学・システム理工学部・准教授・平田 孝志

関西大学・環境都市工学部・教授・山本 秀樹

関西大学・化学生命工学部・教授・石川 正司

関西大学・化学生命工学部・教授・宮田 隆志

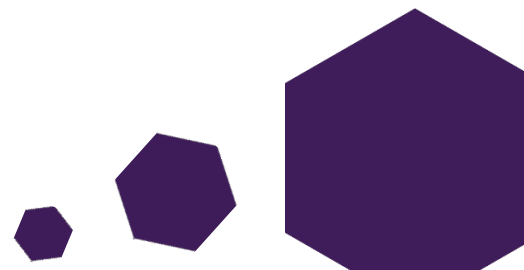
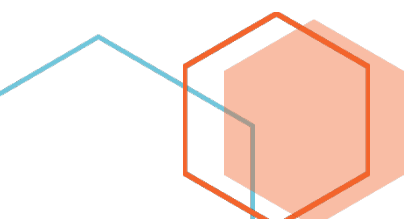
関西大学・化学生命工学部・助教・細見 亮太


成果の概要

主催団体である（公益社団法人）日本工学会、日本学術会議から、第5回世界工学会議開催に際し、本学の科学技術に対する評価を持って、第1回(2000年)のドイツ開催から4年に1回開催され、中国、ブラジル、スイスに続き、2015年は日本での開催となった。特に京都での開催にちなみ、関西の企業、大学の中から、日本の工学に関するコンテンツをアピールする観点で関西大学がセレクトされ、学長から理工学3学部長、社会安全学部長等に相談の後、上述の研究者の参画を得ることとなった。

タイトルの副題である、「環境、化学・エネルギー、社会安全、情報技術など先端科学技術がもたらす、豊かで安全安心な暮らしをめざして」に基づき展示を行ったことによって、個々の研究者の発表とともに、関西大学の多様な研究が活発に行われていることが、世界的にアピールすることができた。

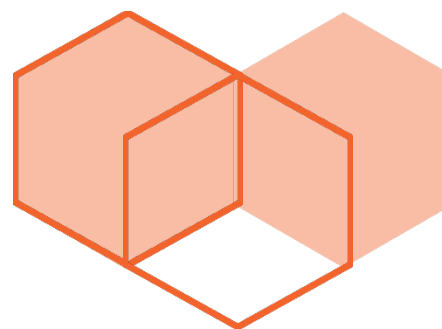
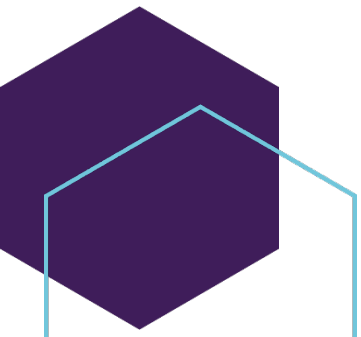
会期4日間(2015/11/29・12/2)で、各日150人程度がブースに立ち寄っていただいていた。ポスターセッションは、若干会場の動線に課題があったため、対応数は期待よりも少なかったが、対応する中では、長時間の対応を行う場面もあった。本学の展示ブースでは、研究内容は勿論のこと、説明を各研究室の院生を主として行ったことが、かえって親和性を創生でき、海外からの来場者も熱心に聞き入ってくれていた。





展示内容も、他のブースは、科学技術に焦点をおいたものがほとんどであったが、本会議の目的である「全世界の平和と経済と社会の進歩のために、工学の進展と国際交流を促進する」を尊重し、「環境、化学・エネルギー、社会安全、情報技術など先端科学技術がもたらす、豊かで安全安心な暮らしをめざして」と題し、テーマ性をもってブース構成したことが各研究内容のアピールと関西大学が取り組む広範な工学教育研究に触れていただく機会となった。

結果として、今回の出展による本学の目的であった、「環境問題、健康と安全安心な暮らし、エネルギー問題など、世界が直面する重要課題の解決に、先端科学技術がいかに応え得るか。さらには、重要文化遺産の保存と継承に挑む文理融合の取組みなど、総合大学ならではの最先端の研究成果を公開する。」を、具体的に成果とすることができた。加えて、参加した学生・院生にとって、海外の方へのプレゼンテーションの経験として、有効であった。





実施成果

〔雑誌論文〕 計（ 0 ）件 うち査読付論文 計（ 0 ）件
（著者名、論文標題、雑誌名、巻、発行年、最初と最後のページ、査読の有無）

〔学会発表〕 計（ 0 ）件 うち招待講演 計（ 0 ）件
（発表者名、発表標題、学会等名、発表年月日、発表場所）

〔図書〕 計（ 0 ）件
（著者名、書名、出版社、発行年、総ページ数）

〔出願〕 計（ 0 ）件
（発明者、権利者、産業財産権の名称、産業財産権の種類、番号、出願年月日、国内・外国の別）

〔取得〕 計（ 0 ）件
（発明者、権利者、産業財産権の名称、産業財産権の種類、番号、出願年月日、国内・外国の別）

